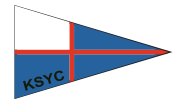


CURRENT ACTIVITIES

現在の活動・イベント

比叡レガッタ



HIEI REGATTA

比叡レガッタは、1969年京都ヨットクラブと琵琶湖ヨット倶楽部の定期戦として始まり、今日まで毎年欠かさず開催され、本年度で第53回を迎えます。

この比叡レガッタが始まる年（1969年）の前年に、ヨーロッパ級が西之園氏の手によって導入され、当時のBYC、KYCの若手メンバーの多くが艇を建造し、今まで沈滞ぎみであった活動が活発になった年で、KYCの若手が発起人となり、BYCとクラブ対抗レースが企画されました。

レースは、ホストクラブを担当し、艇種は、お互いが持つ艇を出し合って、行います。当初はシーホースとヨー

ロッパの組合せ、近年では、シーホースとレーザーで行うのが通例となっています。レース後は趣向を凝らしたパーティでさらに親睦を深めるといった形で初秋の一日を楽しみます。

2005年第37回大会からは、湖翔ヨット倶楽部も加わり、3クラブ対抗レースとなり、より盛り上がりを見せています。今までの成績は、別表にまとめています。初期頃のBYC常勝時代がありましたが、近年は成績は拮抗しているようです。成績にこだわらず、いつまでも続けていきたいイベントです。



第43回大会（2011年）



第43回大会 (2011年)

■ 比叡レガッタの優勝杯（舵輪）の歴史

東田 渉

KYCに大学生で横山君という若いクラブ員がおり、これまたBYCにも負けず劣らず当時、低迷活動状態であったKYC内で若手一人で孤軍奮闘し、クラブ活動に頑張っているという噂を得て、交流を持ったのがその後発展し、第一回比叡レガッタが両クラブ対抗で盛大に行われたのが1969年のことです。当時、我ら発起者五人で、優勝杯に充てる舵輪を捜しまわり、数日間、値段交渉の為通い続け、値切りに値切って、12000円でやっと手にいれたあの骨董屋は未だ河原町丸太町下った西側に在るのでしょうか？



比叡レガッタの優勝舵輪



■ 比叡レガッタ 成績表

回	年月	年	ホスト	優勝	2位	3位	備考
1	1969.08	544	KYC	BYC	KYC	-	
2	1970.09	45	BYC	KYC	BYC	-	
3	1971.08	46	KYC	BYC	KYC	-	
4	1972.09	47	BYC	BYC	KYC	-	BYC 創立 50 周年 琵琶湖ホテル
5	1973.10	48	KYC	BYC	KYC	-	
6	1974.09	49	BYC	BYC	KYC	-	レース後 琵琶湖ホテル
7	1975.09	50	KYC	BYC	KYC	-	
8	1976.08	51	BYC	BYC	KYC	-	レース後 琵琶湖ホテル
9	1977.09	52	KYC	BYC	KYC	-	
10	1978.07	53	BYC	BYC	KYC	-	
11	1979.09	54	KYC	BYC	KYC	-	
12	1980.05	55	BYC	BYC	KYC	-	
13	1981.10	56	KYC	引き分け		-	
14	1982.10	57	BYC	KYC	BYC	-	BYC 創立 60 周年 艇庫
15	1983.09	58	KYC	BYC	KYC	-	
16	1984.09	59	BYC	KYC	BYC	-	
17	1985.09	60	KYC	BYC	KYC	-	
18	1986.10	61	BYC	KYC	BYC	-	
19	1987.10	62	KYC	KYC	BYC	-	
20	1988.09	63	BYC	BYC	KYC	-	第 20 回前夜祭ミシガン
21	1989.09	H1	KYC	BYC	KYC	-	
22	1990.10	2	BYC	BYC	KYC	-	
23	1991.09	3	KYC	BYC	KYC	-	
24	1992.09	4	BYC	KYC	BYC	-	BYC 創立 70 年ピアンカ
25	1993.09	5	KYC	KYC	BYC	-	
26	1994.09	6	BYC	BYC	KYC	-	
27	1995.09	7	KYC	BYC	KYC	-	
28	1996.09	8	KYC	KYC	BYC	-	
29	1997.09	9	KYC	KYC	BYC	-	
30	1998.09	10	BYC	BYC	KYC	-	第 1 回 SAIL おおつ
31	1999.09	11	KYC	KYC	BYC	-	
32	2000.09	12	BYC	BYC	KYC	-	
33	2001.09	13	KYC	BYC	KYC	-	
34	2002.09	14	BYC	BYC	KYC	-	BYC 創立 80 周年 琵琶湖ホテル
35	2004.04	15	BYC	KYC	BYC	-	
36	2004.09	15	BYC	BYC	KYC	-	
37	2005.09	17	KYC	KSYC	KYC	BYC	KSYC 初参加
38	2006.09	18	BYC	KSYC	BYC	KYC	
39	2007.09	19	KSYC	BYC	KYC	KSYC	
40	2008.09	20	KYC	KYC	KSYC	BYC	第 10 回 SAIL おおつ
41	2009.09	21	BYC	BYC	KSYC	KYC	
42	2010.09	22	KSYC	KYC	BYC	KSYC	
43	2011.09	23	KYC	BYC	KYC	KSYC	
44	2012.09	24	BYC	BYC	KSYC	KYC	BYC 創立 90 周年 ミシガン
45	2013.09.8	25	KSYC	BYC	?	?	
46	2014.9.7	26	KYC	KSYC	KYC	BYC	
47	2015.9.6	27	BYC	KYC	KSYC	BYC	
48	2016.9.4	28	KSYC	BYC	KYC	KSYC	
49	2017.9.3	29	KYC	KSYC	BYC	KYC	
50	2018.9.16	30	BYC	BYC	?	?	
51	2019	R1	KSYC	BYC	?	?	
	2020	R2					コロナ禍で中止
	2021	R3					コロナ禍で中止
	2022	R4					コロナ禍で中止
52	2023.9.10	R5	KYC	KSYC	KYC	BYC	
53	2024.9.8	R6	BYC	?	?	?	BYC 創立 100 周年 琵琶湖ホテル

備考：通算 BYC: 32 勝、KYC:14 勝、KSYC:5 勝

SAIL おおつ

SAIL OTSU



参加賞のTシャツ

持回りトロフィー

SAIL おおつは、ヨットの振興と普及を図るべく、ディンギーならどんな艇種でも参加可能なオープンヨットレースで、1998年大津市制100周年記念行事の一環として以前より主催事業で開催してきたビワコ・カインド・レガッタを発展的に継承する形で、京都市新聞社の主催を得て、毎年開催していました。

大津市制100周年への取組募集があり、本田氏よりイベントを計画してみても、との提案で検討が始まりました。当時、山田市長に100艇のヨットのパレードを「なぎさ公園」に沿ってと話したら、諸行事に加えて是非となりました。

ところが、なぎさ公園沿いは建物が隣接し、風の条件が悪く、岸辺は藻が一杯でセーリングは難しい状況でしたが、BYCのスタッフで、祝賀のセーリングパレードが出来ました。

またこれをきっかけに当時の京都新聞社の坂上社長に琵琶湖ヨット倶楽部が1973年から単独で開いてきました「琵琶湖カインドレガッタ」を新聞社主催でとお願いし、1998年、名前を「SAIL おおつ」として発足しました。新聞社が主催のヨットレースは他になく、日本セーリング連盟の役員会へも報告し、大いに関心を得ま

した。

新聞社では開催予告やレース後の報告など、毎回大きい紙面を割いていただきました。第10回の開催までは1ページのカラー刷りでレースの写真を出してもらい、レースに参加している人たちのスナップ写真が出て大変好評でした。

2019年第21回大会まで続きましたが、その後コロナ禍で2年間の中止を余儀なくされました。また、寄る利波を受け京都新聞社のスポンサーシップが途切れ2022年に再開したレースからは再び単独開催を余儀なくされました。そこでBYC100周年、ビワコカインドレガッタ50周年を迎えるにあたり、「ビワコ・カインド・レガッタ」の名称を復刻しようということになりました。

以降は「ビワコカインドレガッタ」として趣旨は同じく単独開催として継続していく所存です。

例年夏休みの最後の日曜日に開催し、シニアからジュニアまで大勢の参加で湖上をにぎわしました。レース後の成績発表と表彰に続いてアフターパーティと抽選会で和やかなヨットマンの交流の場がこのレースの特色です。



2011年 スタートシーン



2011年 集合写真

■ SAIL おおつの企画 青木 英明

SAIL おおつ企画・実施に至る経過を以下に述べます。

1998年が大津市制100周年として記念イベントの募集がなされており、これへの応募が何かの形でできないかとの提案が本田氏から出されました。

日経デザイン誌の記事の中で、ドイツのキールウィークに関する記事があり、ヨットレース週間にヨットと街が一体になった様子が記述されていました。

日頃、我々がセーリングを楽しむ中で、ただ単に利己主義的に一般とは関わり無い世界で活動しています。一方、一般の市民の方々も湖面を帆走するヨットを大津の象徴ともイメージすべく感じているもの(観光案内にはヨットの絵が多くかかっている)、実際に接する機会は少ない状況です。

我々もこの素晴らしいセーリングの世界を隔離された排他的なウォータースポーツではなく、街から受け入れられる存在にしたい。そのことが、最近沈滞気味のセーリングスポーツの底辺を広げるきっかけにならないか?と考えました。

大津市は公園として整備された美しい湖岸を有し、大抵の天候でも安全に帆走できるため、ここでレースを行えば、市民もレースを手取るように見れてヨットの素晴らしい世界を感じていただけるのでは、と考えたわけです。

セーラーにとっては、面白くないコースかも知れませんが、湖岸の観客席から、声援が聞こえれば楽しめる。年に一度はそういったパレードレースがあってもいいな、

と思ったわけです。

長谷川会長の計らいで、大津市制100周年行事の一環として、また、主催に京都新聞社を迎え、充実した体制での開催となりました。

「街との共生」のテーマで始め、当初は大変多くの参加を集めましたが、実際には、宣伝活動もうまくなく、観客も思ったほど集まらない、コース沿いでは藻が多く帆走しにくく、選手にとっては困難な状況もあり、第5回からは、柳ヶ崎の公園が整備されたこともあり、カインドレガッタと同じように柳ヶ崎沖にレース海面を移し、開催することになりました。しかし、「街との共生」ということは念頭において、楽しいイベントとして継続していきたいものと考えます。



日経デザイン記事 (キールウィークデザインコンペ)



SAIL おおつ におの浜からの光景

7 2000年(平成12年)10月17日 火曜日

鮮やかな帆満開 比叡の山並みを背に、秋風を慎重に読んで進むヨット



帆に秋風 湖上疾走

琵琶湖で「SAILおおつ」 波を切り白熱レース

巧みな操船技術 第1マークを巧みに回り伏走するOPの少年ら

風をつかまえる 風をききとらわけて旗を出す選手ら

届け、熱い声援 湖上には、熱い声援が送られる

ゴールは目の前 ゴール直前にある選手ら




2000年

8 2001年(平成13年)10月23日 火曜日

琵琶湖で「SAILおおつ」

岸辺から風を受けて走るヨットの姿が楽しめるヨットレース「SAILおおつ」(京都新聞社主催、琵琶湖ヨット倶楽部主管)が、大津市・なきさ公園沖の琵琶湖で2日、開かれた。冷たい雨が降るあいにくの天気だったが、参加者らは巧みに帆を操った。

3年前の大津市創設100周年を記念して始まったレースは、今年で4回目。だれでも参加できる一般の部と、中学生以下の子どもが参加するオブティリスト(OP)の部があり、合わせて5艇が参加、湖上を彩った。

レースは午前11時にスタート。沖合には琵琶湖に多いという安定した北東の風が吹き、風をはらんだ白い帆がめまぐるしく白く輝きわたった。コースが最狭で湖岸から約50メートルと近いので、OPに出場した選手の家族らが、湖岸からレースを見守った。

白熱レース 風に乗って

巧みな帆走 湖上を彩る

力いっぱい 体を振り、懸命に帆をたてる

次々ターン 慎重に風を読み、マークを回る各艇

息びったり 呼吸を合わせて、セーラーは慎重に操る

やった1番 19歳、琵琶湖在住の中学生

2ショット 琵琶湖の名物、観光船「ミシガン」を背景に

2001年









2011 SAIL おおつのシーン



■ ヨットハーバーの存続を求め、湖上帆走デモを実施 青木 英明 J-SAILING誌より抜粋(2010年8月)

2010年12月6日、大津市におの浜の湖岸沿いを約150艇のヨットを集め、セーリングによる抗議デモ行進を行いました。ヨットでデモ行進なんて恐らく日本でも初めてではないかと思えます。その顛末を報告いたします。

昨年8月、県財政困窮の中、滋賀県行政経営改革委員会から「外郭団体および公の施設の見直しに関する提言」が滋賀県知事に提出され、この中で、滋賀県立柳が崎ヨットハーバーが、「民間への売却、不調の場合は平成22年度の指定管理終了後に廃止すべき」との報告がなされました。

現在の県営柳が崎ヨットハーバーは、1962年(昭和37年)に竣工しましたが、元々は日本ヨット倶楽部(1922年創設、後に琵琶湖ヨット倶楽部に改称)が1933年(昭和8年)にこの地に艇庫を構えたのが最初で、日本で初めてIYRU競技規則を翻訳発行するなど、昭和初期から活発にヨットレースが行われてきました。いわゆる日本ヨット競技のルーツでもある大変重要な場所なのです。以降、この地からオリンピックセーラーを含め、多くの優秀なヨット乗りを輩出してきました。

この危機に直面し、この地がマンションなどになってしまう姿を想像するに、何としても反対の声を伝えるべきとの声が上

がりました。滋賀県セーリング連盟からも存続を求める嘆願書や署名活動を行い折衝がなされました。我々利用者としても何が出来るのか皆で協議する中、抗議デモをヨットでやってみようということになりました。大津市におの浜は県庁にも近く湖岸の公園として整備され、岸ギリギリまでセーリングすることが可能です。抗議の意味合いを一般の方に広く訴えるには、目立つこと、またマスコミに広く捕えられることが必要です。そこで、ヨットハーバーの関係者以外にも学連、実業団、クルーザーなど、近隣のヨットハーバーの仲間にも幅広く呼び掛け、協力を求めました。また、ハーバー存続を求め、抗議の意思を示すのぼりを作成し、各艇に掲げました。

12月6日、冬の西風が入る寒い日でしたが、なんと約150艇が集まりました。屋時の約1時間、におの浜湖岸沿いに2つのマークを打ち、その間をセーリングで往復するだけです。東行きは追手となり、岸沿いギリギリに帆走することで、湖岸からは150艇のヨットが



長谷川会長挨拶(開会式にて)

目の前をパレードする大変壮観で美しい光景を演出することができました。

マスコミも地元TV局、主要紙、共同通信など多くの直接取材を受け、翌日の各紙で大きく報じられました。共同通信の取材により、全国各地の新聞でも取り扱われました。また、朝日新聞はヘリコプターを飛ばして取材、その航空写真が紙面を飾りました。

その効果は大変大きかったようで、嘉田県知事からも「ヨットの伝統は守っていく」との直接の言葉もいただきました。県関係者からは、今回のこともあり、早くに見直しが行われ、ヨットハーバー存続は確定し、今後の運営形態については県連が管理を受託する方向で調整が進んでいると聞きます。財政状況が厳しいのは事実であり、県から受けている補助金(年間約300万





円とのこと)は基本無くす方向で運営をどうしていくか難しい課題もあります。我々利用者としては、よりセーリング競技が理解される中、その活動に合った柔軟な運用形態を求める所で、公営ではありながら、細かい規制に左右されず、箱物運営でない、利用者そして社会に根差したヨットハーバーにしていきたいと思いますと念願する次第です。

今回のことで良かったこと、それは、日頃疎遠がちな学連やクルーザーの皆さんと方向を一つにし行動できたこと、思いが一つになると、大きな活動になるということです。参加者の感想をお伝えします。「初めて湖上デモなるものに参加しましたが、陸にいる人とも会話ができたり、「がんばれー」と手を振って声援をもらったり、日ごろは接点の無い学生さんと「楽しいね」と言い合ったり、楽しかったです。今回は、ハーバー存続を訴えるのが主旨でしたが、単純にこんな風なセーリングもいいなあと思いました。」

もう一点、気付いた事、我々も勝手に遊ぶだけでなく、社会に還元する行為も必要なのではないかということです。ヨットは滋賀県にふさわしい存在だと訴えるなら、具体的に社会との共存を示すべきではないかと。このセーリングパレードはその答えの一つになるのではないかと思います。ヨットが優れている点は、見ていて美しい、景観面、環境面で訴求効果があるということです。その光景を演出すること、街を活性化させる効果もあると思います。次回

は是非のぼりなしでパレードできればと思った次第です。

最後に、イベント実施に際し、滋賀県セーリング連盟にご指導いただきましたこと、京都府セーリング連盟、学連、実業団、ジュニアヨットクラブ、クルーザー関係者にもご協力いただきましたこと深く御礼申し上げます。



湖岸のセーリングパレードを演出

BYC カップ

BYC CUP

月例のオープンレース。シングルハンド中心ですが、どの様な艇種も参加できるオープンレースです。気楽にヨットレースを楽しむ事が目的は参加者それぞれ、練習に、気晴らしに利用いただける気楽なレースがモットーです。

毎年3月から12月の間、計10日のレースを集計して得点を競います。短時間のレースですが、多い日で8レース程度は行いますので、年間では50～60レースは行うこととなります。

また、昼ごろ集合で、午後1：30からと遅く始め、短時間でショートレースを沢山行うというのも特徴です。

こういった、フリートレース活動は、BYCの原点ともいべきもので、創設当時の5m級、A級の時代でも同様の活動が行われていました。

1960年後半、ヨーロッパモス級が西之園氏により日本に導入され、BYC、KYCを中心にフリート活動が始まりました。BYC会長杯として始まったのがその原点ではないかと思えます。

現在の運営の原型は1990年にレーザー柳ヶ崎フリートとして、青木英明氏、秋山紀夫氏等を中心に月例レースを年間を通して開催した、Biwako Singlehand Dinghy Racingです。短時間に集中したレベルの高い練習レースとなり、シングルハンダーの輪が大きく広がりました。





シーズン表彰式 2010年4月

以降、レーザ級級の活動が活発となり、かつてのヨーロッパ級と同様、琵琶湖地域開催のレースを多く主管するようになりました。

レーザ級級の会員の活躍は目覚しく、秋山紀夫氏は全日本で2度タイトルを取得、1994（H6）年和歌山で開催された、レーザマスターズ世界選手権で優勝するなど活躍しました。

現在のクラブ員の大半は、レーザ級でレースを楽しんだ仲間です。この延長で2002年以降、BYCの主催行事としてトロフィーを作り、レーザフリートレースが引き継がれた形になります。もちろん受入はオープンで誰でも参加できます。

■ 米国フリートレース運営形態を導入 青木 英明

1988年～1990年の間、青木（英）氏が米国駐在でコネチカット州ウエストポートのCeder Point Yacht Clubで行われていたLaser Frostbite Seriesに参加、毎日曜、午後からのショートコースレースを体験、90年に帰国後、柳が崎で、この運営方法を真似して始めたのが、Biwako

Singlehand Dinghy Racing。これが、今のBYC CUPの運営形態になっています。

会社員で家庭もあり、日曜日といえども、終日を費やすスケジュールでは、実際人は集まらず、続きません。気合いを入れるレースではなく、普段着でヨットレースを楽しむ場を、ということで、午後からの

短時間設定で行っています。

運営も一人でも運営できるよう、面倒で、良く間違えるフラッグはなし、音響信号のみで簡易的に運営します。





2008年5月



2008年5月



2008年5月



2008年5月



2008年10月



2008年10月



2008年10月



2008年10月



2010年12月



2007年10月

BYC CUPのシーン

■ 米 Cedar Point Yacht Club との交流 (2006-2007)

青木 英明

2006年11月に米国から Daniel Lent 氏が訪れ、11/26のBYC CUPに参加いただきました。先般彼より、5月6日に開催された、彼が所属する Cedar Point Yacht Club (CPYC、米コネチカット州)の Commissioning Day Ceremony (運営役員がフラッグポール下に集まり、会長の念頭方針や新役員の紹介等が行われる年初のオフィシャルセレモニー)において、彼に贈呈したBYCのフラッグが、正式にCPYCに贈呈され、BYCのことが紹介されたと報告がありました。代わりに正式交換されたCPYCのフラッグ(burgee)が送られてきました。CPYCの会報にその様子が写真入りで報じられていますので、紹介いたします。

Commodore Little accepted from Dan Lent a Biwako Yacht Club burgee, which had been given to Dan during a visit to Japan by Hideaki Aoki. Hideaki was a CPYC Laser frostbite sailor in the late 80's when Danny was also first frostbiting at CPYC. Biwako Yacht Club is the oldest yacht club in Japan and is located on Lake Biwa near Kyoto where many one design dinghy classes race. The Biwako officers invite any CPYC Laser sailors to visit their club and go sailing. Commodore Little in return presented a CPYC burgee and asked Dan to "send it to Hideaki and the Biwako Yacht Club with our thanks and warmest regards."

《CPYCの会報 "THE BULLETIN" から抜粋》

【訳】会長のリトル氏は琵琶湖ヨット倶楽部のバージをダン・レントから贈与を受けました。これはダン氏が日本訪問中青木英明氏から受け取ったものです。青木氏は80年代後半にCPYCでFrostbitに参加したセーラーで、当時ダン氏はCPYCのFrostbiteに初参加した頃の事だそうです。琵琶湖ヨット倶楽部は日本で最も古いヨットクラブで京都に近い琵琶湖に位置し、多くのワンデザインディングシーのクラ

スレースが行われています。BYCのメンバーはCPYCのレーザーセーラーをいつでもセーリングに招待してくれるとの事です。リトル会長はお返しにCPYCのバージを贈呈し、青木氏と琵琶湖ヨット倶楽部に感謝と敬意を伝えるようダンに託しました。

【写真訳】 Commissioning Day Ceremonyにおいて、ダン・レントより琵琶湖ヨット倶楽部のバージがリトル会長に贈呈された。



Dan Lent presents Biwako YC burgee to Commodore Little at the Commissioning Day ceremony



BYC CUP 後に記念撮影
長谷川会長が持っているのがCPYCのバージです



Dan Lent 氏を迎えて

Austria への遠征

Classic Yacht Week in Austria
2010年7月



BYC が所有している EZ がきっかけで、オーストリアのヨットクラブと深いつながりが出来ました。EZ は戦前、ドイツ、オーストリア地区で発達したレースクラスですが、その復元・保存を進めている Artur Vlasaty 氏が BYC のホームページで日本での EZ の存在を見つけたのがそのきっかけです。彼からメール連絡を受け、BYC の EZ のルーツを知らせたところ、感動し、艇を見に来日しました。

2010年夏、彼からオーストリア、ザルツブルグ近郊の湖、ウォルフガング湖で開催された、オーストリア・

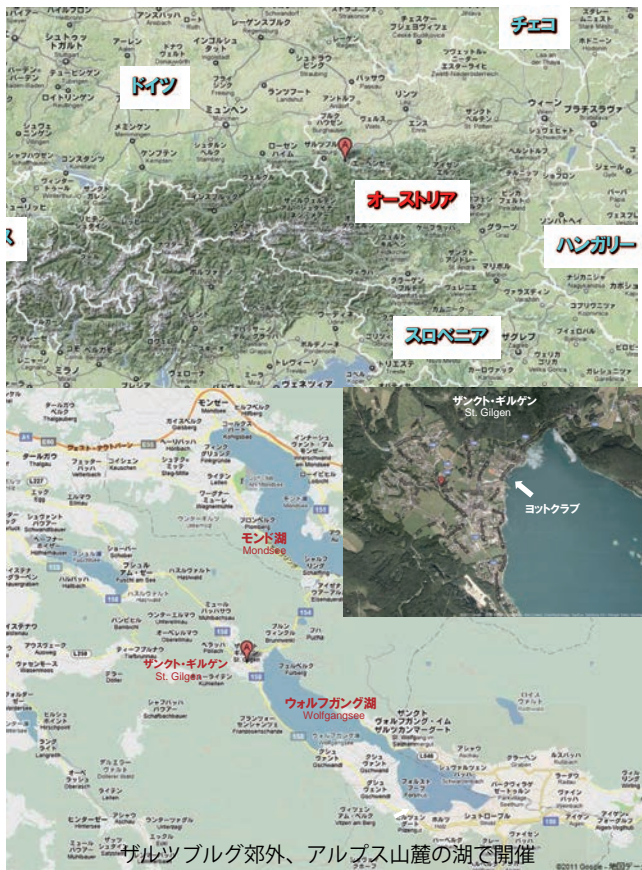
クラシック・ヨット・ウィークへの参加の誘いを受け、長谷川会長以下4名で遠征を行いました。

我々は、EZ の同型艇とオリンピアヨレ級をチャーターし、レースに望みました。

強風下トラブルもあり、レース結果は芳しくありませんでしたが、同じクラシックボートを大切にしているヨットクラブとして最大級の歓迎を受け、深い交流へと発展、素晴らしい体験となりました。



チャーターした EINHEITS ZEHNER ウォルフガング湖でのセーリング



Union Yacht Club Wolfgangsee



ヨットクラブ桟橋からヴォルフガング湖を望む



Internationale Österreichische Traditions-Segelwoche 2010
大会ポスター



Internationale Österreichische Traditions-Segelwoche 2010
22. bis 25. Juli 2010 St. Gilgen - Wolfgangsee

大会プログラム



帆走指示書



チャーターした "N-Jolle"(EINHEITS ZEHNER)





来日した A. Vlasaty 氏 2009年1月



BYCのEINHEITS ZEHNER 2010年7月



チャーターした同型艇



主催者 k.u.k. 王宮ヨット協会 Holler 会長 (右) と



旧王室ハプスブルグ氏 (右) と



表彰式にて



大津拠点の琵琶湖倶楽部

「幻の設計図」が結ぶ交流

ウィーンのエニオンクラブ

提供受け、感謝の湖国入り

独の名ヨットE Zが縁

「幻の図面をありがと」。ドイツで設計された戦前の木造ヨットをめぐり、同型船を持つオーストリア・ウィーンのエニオンヨットクラブとの関係者が二十九日、大津市の琵琶湖ヨット倶楽部を訪問した。欧州では入手困難な設計図のコピーを昨年末に郵送した同倶楽部に感謝の気持ちを表すため、両国のヨットマンは今後も交流を続けることを約束した。

「日本に現存、奇跡」

同クラブは一九〇八つ。ウィーンのエニオンは、不動産業年設立で、同倶楽部よりある湖が拠点で三アトウアー・プラサリ十四年古い歴史を持つ。訪テイスン(40)。世界で数少ないドイツ製木造ヨットの情報収集やレース復元に取り組み中、同型船(EZ)を持つ同倶楽部とメールで交流を始め、ハワイへの休暇途中に日本に立ち寄った。



EZを携み、今後の交流を誓い合ったクラサティン(左)と青木副会長(大津市・県立ヨットハーバー)

大津市柳が崎の県立ヨットハーバー艇庫で青木英明副会長にクラブ旗を手渡し、EZの説明を受けたクラサティン氏は「日本にこの船があるのはミラクルだ」と興奮。「第二次大戦で散逸した船や設計図を大切に保管していることを尊敬します。同じ船を持つ者として、今後も人の交流や情報共有を進めたい」と笑顔で話した。

第3種郵便物認可

木造ヨットの縁 世界へ出航

70年以上前に建造、保管

一昨年、木造ヨットの情報収集をしているオーストリアのエニオンヨットクラブの関係者が、同倶楽部所有の木造ヨット「アインハイツ・ツエーナー」(EZ)の存在を知って同倶楽部に連絡してきた。同倶楽部が保管しているEZの設計図が欧州では入手困難なことが分かり、コピーを送ったことから交流が始まった。



水しぶきをあげて琵琶湖を疾走する琵琶湖ヨット倶楽部所有の「アインハイツ・ツエーナー」。あめ色の重厚な船体がひととき目をひく

交流のオーストリアにレース招待

大会への参加を呼びかけるメールが届いた。1950年以前に建造もしくは設計されたヨットだけが出場する大会。同倶楽部のメンバー4人で参加を決めた。同倶楽部所有のEZは70年以上前の建造。年一回、ヨットレースで琵琶湖を疾走するが、ニスを塗り直したり、木と木の継ぎ目をつめるなど手入れが大変という。同倶楽部の長谷川和之会長(79)は「こういう機会に恵まれたのは先人が大事にヨットを保管してきたから」と感謝する。大会で現地のヨットマンが所有するEZと同型のヨットに乗る。メンバーは出発前に琵琶湖でEZに乗って感触を確かめた。青木さんは「アルプス近くの湖に古いヨットが何十艇も並ぶ姿は想像しただけで楽しみ。景色もレースも楽しみたい」と話していた。(逸見祐介)

琵琶湖ヨット倶楽部

大津市の「琵琶湖ヨット倶楽部」のメンバー4人が、戦前の木造ヨットを通じて交流しているオーストリアのヨットクラブから招待を受け、22日から同国で始まったクラシックヨットの大会に出場している。メンバーは、1台の木造船が取り持つ縁に感謝し、「歴史あるクラブに大事な足跡が残せる」と喜んでいる。

■ 素晴らしい帆走艇たち オーストリア国際クラシックセールウィーク

J-Sailing 誌から抜粋
(2010年10月)

レポート / 青木英明・琵琶湖ヨット倶楽部
Photo by Lois Nagl

2008年11月、オーストリア・ウィーン在住のアーサー・ヴラサティ氏から突然Eメールが送られてきました。「貴クラブのホームページにアインハイッツツェナー (Einheitszehner) 級の写真があるが、この歴史的なクラスの調査をしており、連絡を取りたい」との内容。この手紙がきっかけで話は思わぬ方向へと進展しました。そのいきさつをご報告します。

琵琶湖ヨット倶楽部 (BYC) が保有するアインハイッツツェナー級 (以下E Z級) のルーツは、当時のクラブ員、故吉本善太氏がベルリンオリンピック (1936年) に出場した際、欧州のレーシングヨットに魅せられ、ドイツから図面を取り寄せ、1939年に日本で建造したものです。

BYCのクラブ艇として現在も帆走可能な状態で保管しており、年に1度の「SAILおおつ」でその雄姿を披露しています。この経緯を伝えると、先方では手元に図面がないとのこと。早速、図面のコピーを送付して、交流が始まりました。驚くことにヴラサティ氏はすぐに来日して艇を確認、ほぼオリジナル設計のまま保管された大変貴重な存在であることに感嘆、彼のホームページでもこのE Zを詳しく紹介しました。その後、図面はE Zの故郷であるベルリンのボートショーで飾られるなど話題となったそうです。

戦前のドイツ・オーストリア地区で帆船積別のレースが活発に行われていたころ、造艇競争が活発となり、その中で勝ち残り規格化されたクラスのひとつがE Z級でした。E Z級はもっとも小さなクラス (通称Nクラス:10平米) で、他に15平米 (M) クラス、20平米 (Z) クラス、22平米 (J) クラスなどがあったそうです。

(思わぬお誘い)

そのヴラサティ氏から、「この7月22~25日にLGT Sailing Cup (Internationale Österreichische Traditions-Segelwoche 2010) 国際オーストリア・クラシック・セールウィーク2010というレースが開催される。一緒にレースに参加しないか」との誘いを受け、BYCの長谷川会長、松田、森、青木の4人で出かけることになったわけです。

レースはk.u.k. Yacht Geschwader (王宮ヨットフリート) が主催し、開催地はオーストリア・ザルツブルグ近郊のザルツカン

マンゲート地区に点在する複数の湖のクラブ。毎年、ホストクラブをかえて開催され、今年はウォルフガング湖 (Wolfgangsee) 畔のザンクト・ギルゲン (St. Gilgen) という小さな街にある、ユニオンヨットクラブ・ウォルフガングゼー (Union Yacht Club Wolfgangsee: UYCW) がホストでした。ここはモーツァルトの母親が暮らした街としても有名で、避暑地でもあります。

参加艇の条件は、基本的に1950年以前の艇 (以降の艇でも以前の建造手法のものに限る。アルミマスト、ダクロンセイルはOK) であること。日本で知られている艇としてはドラゴン級がありますが、他は見られない艇種ばかりです。

多くは波のあまり立たない湖水で発達した艇種で、フリーボードが低く、ビームは狭く、細長いハル形状が特徴です。中でも最大のソルダークラス級は艇長約40ft、セイル面積51平米という巨大なキールボート。多くはガブリグの木造艇で、この船がセーリングする姿は「美しい」の一言です。

このようなクラシックボートが近隣のドイツ、スイスからも42艇が集まり、レースが繰り広げられました。これらがいっせいにレースをする光景は、まるでタイムマシンに乗って時代を遡ったのではないかと思うほどで、夢心地にさせてくれるもので



ウォルフガング湖を帆走するクラシックヨットのSクラス

した。どの艇も木造ニス塗りでピカピカに整備された、それはそれは美しいまさに工芸品ばかりです。

我々はヴラサティ氏の配慮で、10平米クラスのE Z級を借りて青木・松田が乗艇。またベルリンオリンピックに採用されたオリンピックアヨレも借り、森が乗艇してレースに参加しました。

(最大級の歓迎)

イベントはオープニングセレモニーから始まりました。旧王室に関係する組織が主催し、旧王国時代の伝統的な軍隊様式で進められました。旧王室ハプスブルグ家ファミリーも出席され、伝統的な音楽が演奏される中でのフラッグセレモニー。ホストクラブのUYCW旗、参加国のオーストリア、ドイツ、スイス、そして日本の国旗が掲揚され、そこに王宮ヨット協会のフラッグが



BYCから遠征した (左から) 森、長谷川会長、松田、青木の4氏



10平米E Z級に乗る青木 (右)・松田チーム



Sクラスのスタートのシーン。SクラスはHalsey Herreshoff の設計によるもので、世界で初めてマルコニーリーグのワンデザインボートとして誕生した。全長max13.2m、幅2m、水線長5.75m、排水量min1950kg、セーラー面積max51平米の要目を持つ。BYCの長谷川会長もこのSクラスの1艇<CIMA>に乗艇しパレードに参加したが、それは過去に米国タフト大統領や、ドイツのウィルヘルム皇帝を乗せた船齢100年の由緒あるボートだったという

運ばれ、掲揚されます。陸上式典の後はハーバー前でのセーリングパレードです。ヨットハーバーの棧橋からは大砲の礼と旧軍隊の敬礼を受けます。

2日目からレースが始まりました。レースは、艇種別にヤードスティックナンバーをつけ、混合タイムハンディキャップ方式で行います。フリートは2クラスに分かれて一斉にレースをします。レース海面は幅の狭い湖で、6つの固定マークを複雑に回航するコース図が与えられ、風に合わせて本部船から指示されます。山あいの地形で風のシフトは激しく、岸沿いの風の振れなどが特異でコース取りが難しく、我々は風の振れを味方にするには最後までできませんでした。

3日目のレースではスタート直後にブローを受けて沈をしてしまいました。オープンデッキのため、水船になると再帆走できずやむなくリタイヤ。最終日も強風コンディションでしたが、レース完走を目指して慎重なセーリングでなんとかフィニッシュしました。

成績は残念な結果でした。でも、オリンピックで出た森選手は、強風の中でも日頃のレーザーでの腕前を生かし、総合27位とまずまずの健闘ぶりでした。

オフィシャルパーティは、ドレスコード付きのフォーマルなものです。街のホテルを借り切り盛大なパーティが繰り広げられました。我々はさまざまな機会に日本のBYCからはるばる来てくれたと紹介を受

け、最大級の歓迎を受けました。旧王室ファミリーの方と話をする機会にも恵まれました。人生の楽しみ方が異なり、まったく縁のない中央ヨーロッパの伝統と生活に根差した祭典に飛び入りし、地元のヨットクラブに4日間どっぷりと浸る中、彼らのヨットクラブライフの素晴らしさを感じることができました。生活の質の高さ、人生を楽しむというのはこういうことなのでしょう。彼らは同じルーツの古いボートを大事にしている仲間として、我々を最大級の礼で迎えてくれました。本当に夢心地で貴重な経験をすることができました。生活習慣が大きく違いますが、古いヨットを大事にするという共通項で深い交流ができるということが、本当に味わいのある大人の趣味だと感じました。BYCの所有艇もまだまだ整備状況は甘く、根本的な補修も必要です。この機会に重い腰を上げ、再整備しなければと思った次第です。

日本にオールドボートは多くないかもしれませんが、このようなイベントでコミュニティを作り、連携を深めていくことは重要ではないでしょうか。小生が知っている範囲では、毎秋サントピアマリーナで開催されている「ウドンヨットレース」がありますが、大変素晴らしい取り組みだと思います。







All Photos by Lois Nagl

EZの修復

Restoring the EINHEITS ZEHNER "SVARA" 2012年2月～8月

EZは近年では吉本氏が1992年に艇体のペイントを行ない改修を行って以来、手が増えられておらず、ハル外板の突き合わせ部のコーキングがだめになるとともに、ペイント剥がれ、艇の接触による損傷も多く、多くの部分でひどい水漏れが起こる状況、事前に艇内部に水を張り、木部を膨張させるも、とても漏水は止まらない状況でした。

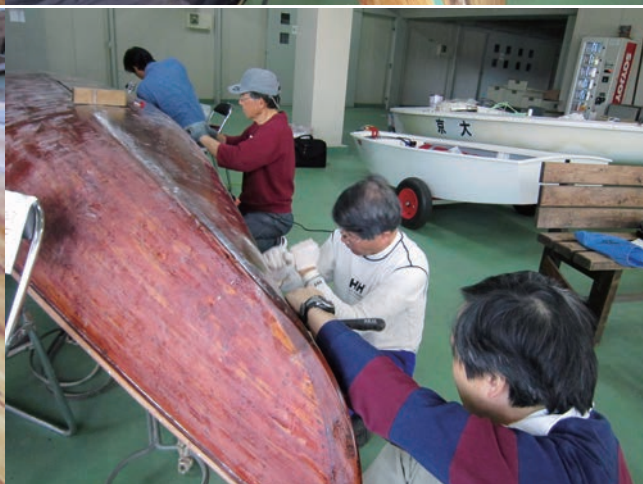
AustriaのUnion Yacht Club Mondseeとの交流もあり、この機会に再度補修をという機運が高まり、KSYCの木下会長に相談、修復指導いただけるとの事で、2月19日からその作業が始まりました。

本年の目標は、艇体コーキング及び塗装のやり直しで漏水の無い、ニス塗りの船体に仕上げることで、安全に帆走出来るよう、艀装部分の整備を行う事です。

改修したいところは山ほどあり、休日のDIYで進める中全ては出来ず、途中で改修は打ち止めとし、8月のSAILおおつでその新たな雄姿を披露させました。

さらに、今回手を付けられなかったマストなどの艀装、セイルなども引き続き手を入れたいとの機運が大きく盛り上がることになりました。





■ EZのニューセールを新調 (Austria で製作) 青木 英明

2012年にEZの大改修を行い、ニス塗りの美しい姿に復活させたものの、セールは古く、またセール形状もドラフトが少なく十分なパワーが得られない状況で、ニューセールを新調しようということになりました。

オーストリアでNクラス (EZ) の協会長を務める Artur Vlasaty 氏 (Union Yacht Club Mondsee 会員) に相談、氏の設計アレンジでオーストリアで設計・製作いただくこととしました。

2013年3月、青木夫妻でオーストリア・ウィーンを訪問、Vlasaty 氏及びそのクラシックボートビルダー仲間との交流も兼ねて現地を訪問、ニューセールを持ち帰ったのです。

この際、ウィーン郊外にある、フリードル氏 (Dr. Wolfgang Friedl, 2023年逝去) のボートヤード (woodenboat.at) を訪問しました。多くの木造艇のリストアがここで行われており、こういった工芸的な専門家がクラシックヨットを支えている現状を知り、その奥深さを感じた次第であります。

その後、EZはこのニューセールでその美しいフォルムを一新し、我々の宝物として85才の帆走可能な現役セーリングボートとして毎年セーリングの雄姿を披露しています。



ウィーン郊外のセールメーカーにて



Dr.Friedl のボートヤードにて



ウィーン郊外のレストランにて

Austria への遠征 2

Classic Yacht Week in Austria

2019年7月



2019年7月、再度オーストリアで開催されたオーストリアクラシックレガッタにメンバー5名で遠征しました。

前回2010年に訪問して以来、2012年にEZの本格的なリストアに取組み、2013年にセイルを新調するなど、このBYCの大先輩方から継承するEZ艇がもたらした海外とのつながりをもう一度堪能しようということで先方の熱烈な歓迎も得て向かうことにしたのです。

開催地のアッター湖はアルプスの山麓に点在する氷河湖のひとつで海のないオーストリアでは比較的大きな湖ですが、琵琶湖の南湖ほどもない大きさです。山あい渡る風は心地よく、湖岸にはプライベート桟橋を持った別荘が点在する素晴らしい環境です。

メンバーは長谷川会長、西村氏、大西氏、小松原氏、青木の5名、長谷川会長の娘さんのユカさんもサポートのため同行いただきました。

このクラシックヨットレースは1950年建造以前の本造艇のみが参加できる特別なレースで、毎年この地の湖に拠点を構えるUnion Yacht Clubで回り持ちで開催される。本年の開催場所は、アッター湖(Attersee)のUnion Yacht Club Attersee(UYCA)で海のないオーストリアにおいて最もメジャーなヨットクラブがホストでありました。

今回はN級(EZ級)では無く、前回に引き続きサポートいただいたArtur Vlasaty氏を始め、woodenboat.atのDr. Friedlのリストア作品であるピカピカのオールドボー



ハンザヨレ級



オリンピアヨレ級

ト(ハンザヨレ)を借用してレースに参加しました。また、オリンピックヨレ級も1艇借用し、小松原氏が一部レースに参加しました。また、我々のレース観戦のためにもクリンカー張りガブリグのDr.Friedlのクルーザーを用意いただき、手厚い歓待を受けました。

今回の旅程は、慣れたこともあり、レンタカーを借りて送迎の面倒を先方にもかけないよう配慮し、自分たちのペースで行動することが出来ました。

レースは前回の様に王室ヨットクラブの主催では無くなっており、高貴なセレモニー色は少なく、和気あいあいとした雰囲気でしたが、集まるボートはそれはそれは美しいピカピカに磨き上げられた木造艇ばかりです。

海外の特に歴史に裏打ちされたヨット文化には深いものがあります。

レースはヤードスティックで競う三角コース中心のクラシックレガッタの他に最終日は縦長の湖全体を往復するロングディスタンスレースが別カウントで行われました。ロングディスタンスレースはクラシック艇に関わらず全艇種が参加可能になっており、100艇以上の参加で毎年の名物レースにもなっています。

今回のレースではハンザヨレで西村・小松原ペアで、また種目別レースも開催され、オリンピックヨレ級を別途借りて小松原氏が参加しました。

コンディションは微風に終始し、重くて足の遅い艇では前の方は走れませんでした。美しい透き通った湖のセーリングをたっぷり堪能しました。

前回はそうでしたが、この中央ヨーロッパの海に開けていない場所においても地元の生活に根ざしたヨットライフがあります。UYCAはオーストリアでは屈指のヨットクラブでOPのジュニアからオリンピック選手まで育成されており(今回、東京五輪の前年でUYCA会長の娘さんが49歳で出場が決まったと言っていた)、またそ



Dr.Friedl 氏のクルーザー

れと同時に工芸品のようなクラシックヨットを愛好する仲間がこのようなイベントを行う、更にはそのための工芸製作を請け負うボートビルダーがいる。みんなみんながヨット好き湖好きで家族や仲間が集う、普通のコミュニティが出来ており、全く生活の一部としてヨットライフが溶け込んでいる姿に感動すると共に、こういう環境が日本にもあればと改めて念願した次第です。

同じ湖のヨットクラブとして、親しくお付き合い出来るようになった、これもヨットの持つ縁と感謝する次第です。



オリンピックヨレ級



UYCA



クラブハウスとレストランスペース







■ 2019年夏オーストリア クラシックウィーク遠征 紀行文

大西 貞安

コロナが大流行する、前の年(2019年夏)にオーストリアのアッター湖で開催されたヨットレースに参戦(見学)する機会があった。

2008年に、スワラ号が縁で、木造ヨットレースへの招待がオーストリアのアートアー・ヴィラサティさんからあり、BYCメンバーが参加された。しかし風が強くマストを折って帰ってこられた経緯がある。

今回ザルツブルグ近郊のアッター湖で開催される、木造ヨットレースに再びBYCに招待が来た。アルプスに囲まれた青い湖、湖畔には高い尖塔の教会が。ここでヨットレースが開催される。行くメンバーの募集があった。「チャンスだ!」

アレヨコレヨという間にオーストリアのザルツブルグ近郊のアッター湖畔へ。

メンバーは長谷川会長(当時)と娘さん、青木さんと現地で会合する西村さんと小松原さん、そして大西である。

今回のレース海域は琵琶湖南湖より幅が約1キロ狭く、長さが約5キロ長い湖である。南のほうはアルプスに囲まれており、氷河湖であるので深さは100メートル以上ある。

湖畔のクラブハウスの前で開会式が開かれたが、なかなかレースは始まらない。風が弱い。

みんなクラブハウス前のテーブル席で待つ。日本チームもテーブルを前に座って待つ。そしたらウェイトレスが注文を取りに来る。わからんのでみんな注文する。な

くなればまた来る。日本チームは上客であった。あとでわかったが別に注文する必要はなかったのである。夕方4時から無料のビール樽が置かれて飲み放題となり、列が出来ていた。

レースまでの間、ピカピカに磨き上げた木造ヨットを見る。金具等はBYCのスワラ号と同じである。本体は木造(昔作られた木造)でマストだけアルミ製のヨットもあった。

このレースに参加するためドイツ、スイス等から木造ヨットをトレーラーに乗せ、車で牽引して来る。ベルリンから来たカイゼル髭のセーラーもおられた。

このヨットクラブ員は1000人以上で、クラブハウスの3階外壁にはヨットレースの出発合図に使う丸いマークが5個あり、湖のレース海域から見えるようになっていた。レストランは一階にあり、広い庭にもテントがかぶせられるテーブル席が多数あった。

アッター湖ではレース運営艇とか業務用の船以外はエンジンの使用が禁じられている。レース観戦に木造のクルーザーに乗せてもらったが、その船もバッテリー使用の電動モーターの船外機であった。

木造の一人乗りデンギーに小松原さんが出場された。一人乗りといっても数人乗れるような厚い木でできた木造ガンネルのヨットであった。

また一日がかりのクルーザーレースもあった。クルーザーレースは丸1日、アッター湖の北にあるハーバーから南端までの

往復である。

帆に赤い十字軍のマークが入った木造のクルーザーで、西村さんと小松原さんが参戦された。

朝からレースに出られたので他の者は遊覧船で南の端まで応援に行ったが会えなかった。湖畔の家にはボートハウスがあり泳いでる人もいた。そのあとアッター湖畔の電車の終着駅で 記念日の式典を見学した。

昔の京都市電のような電車で、国鉄の駅まで無料で行けたので乗った。トコトコ牧場の中を片道30分かけて、登って行き、国鉄の駅で引き返した。満員であった。

レースの最終日に表彰式があった。BYCに声をかけて招待してくれたアートアー・ヴィラサティさんは入賞し、銀の皿を受領された。BYCのクラブ室に飾ってある銀の皿がそれである。

レースはおわり、西村さんと小松原さんと別れてわれわれはメルクの町へ、そしてウィーンへと行き、アートアー・ヴィラサティにウィーンの街を案内してもらった。そして帰郷。アートアー・ヴィラサティさん本当にありがとうございました。(文責 大西貞安)

なお この時の大会ビデオがユニオンヨットクラブで作成され、それがBYCのホームページ内に入っています。



コロナ禍の試練

Trials of COVID-19

2020-2023

2020年からパンデミックが世界を襲い、日本でも感染予防が強く求められるようになり、BYCの活動も大きく制限せざるを得なくなった。

2020年3月、5月には緊急事態宣言が発せられるなど、ヨットハーバー自体の営業にも制限が入り、クラブレースも中止せざるを得ない状態に陥った。

結局、この影響は約3年に渡り続き、SAIL おおつは2020年、2021年度を中止、2022年には何とか開催したものの、感染対策を徹底するなど制限下での開催となった。また、比叡レガッタはアフターレースが大きな趣旨でもあり、計3年に渡り中止とせざるを得なくなった。

また、2022年は、BYCにとって大きな節目を迎える創立100周年であるものの、大勢を集めてのイベントはなお控えるべきとの判断から、2022年度のSAIL おおつ開催では創立100周年記念レースとして実施したものの、祝賀会は2年延期することとなった。



コロナ禍でのBYC CUP開催 湖の上はいつもと変わらないのだけれど、

オーストリアからの贈り物

Gift from Austria

2019年7月

2022年、オーストリア Union Yacht Club Mondsee (UYCMo) の Artur Vlasaty 氏から BYC100 周年に当たって素晴らしい贈り物が届きました。EZ の 1/10 ハーフモデルです。しかも、詳細なところまで手作りで心のこもった贈り物です。また宝物が増えました。今後も永続的にのお付き合い願えればと思う次第です。

先方はヨット仲間でもあり、また木工工芸を愛する仲間でもあります。先方を訪問した際には日本のかんな、のみをプレゼントしました。日本の工芸にも憧れがあるようで、大変喜ばれたものです。



オーストリアでのお土産贈呈



記念撮影

100周年記念植樹

100th Anniversary Tree Planting

2024年3月

2025年国スポ滋賀大会セーリング競技が柳が崎ヨットハーバーで開催され、施設が一部リニューアルされることになった。この際にBYCとして記念植樹の寄付をしたいと申し入れ、ハーバーの了解を得て進める事となった。

2024年3月31日、コロナ禍で2年遅れたものの、ハナミズキを4本ヨットハーバーの南出口通路に植えた。

100周年記念事業として何が良いか議論をする中で、次の100年間ずっと残るもの、BYCのこの地に置ける存在をいつまでも伝え続けてくれることを願ってヨットハーバーへの植樹寄付を行うこととした。

各4本のハナミズキの元には、植樹寄贈の説明と共に、BYCの歴史記述を説明する説明パネルを設置した。その内容は写真を御覧いただきたい。

- ①日本ヨット倶楽部の誕生
- ②日本ヨット競技開催の地
- ③クラブハウスと艇庫
- ④琵琶湖でヨットに乗ろう！

この地にBYCが創立し、ヨット競技を普及させ、クラブライフを営む活動拠点として、そして今後もセーリングを愛好する活動姿勢を続けていく宣言として認識いただければと願って設置したものである。



